

**区政改革を推進し持続可能な区政運営と区民サービスの向上**

**取り組むべき課題は…**

- ①持続可能な区政運営と、区民サービス向上の両立
  - ・受益と負担のバランスを含めた行政サービスのあり方の検討
- ②行政における人材育成と組織の見直し
  - ・各部署、職員の役割の明確化
  - ・施策を速やかに執行できる組織体制の実現
  - ・生え抜き職員の教育と育成
- ③恒常的な財源の確保
  - ・特別区財政調整交付金の確保
  - ・起債と基金の活用



# 練馬区議会議員 第五十九代議長 関口かずお

**ガラクタ公園(貫井4)  
グラウンド部分の  
整備工事が始まります!**

**さらに使いやすく、親しみやすい公園に!**

貫井地区の中心に位置するガラクタ公園。グラウンド部分を中心とした整備計画が決定し本年3月に、整備工事が始まります。

議会運営委員会 委員長  
常任委員会 企画総務委員会 委員  
特別委員会 総合・災害対策等特別委員会 委員  
各種委員会 民生委員推薦会、土地開発公社評議委員会

ご相談は… 関口かずお 事務所  
〒176-0021 練馬区貫井 3-53-8  
Tel / Fax : 3998-1752 HP : <http://www.k-sekiguchi.jp/>

今年は申年。「変化の年」と言われる申年らしく、日本の社会が、様々な転換点を迎えており、年男である私もまた、自らの視点と経験を活かし、日々、エネルギーを発揮していく決意だ。

申年のご縁なのか、先日、京都大学・山極壽一教授の、スピーチ録を読んだ。山極教授は、「二十代のころ、ルワンダの熱帯雨林で、ゴリラと一緒に生活した経験を持つ。人間から一步離れて、人間の社会を眺めると、人間の家族のあり方が見えてくる」という。ゴリラの赤ちゃんは、「1kg足らずの体重で生まれ、その後三年間はお乳で育つ。特に最初の一年は、母ゴリラが赤ちゃんを離さない。寝る時も、動くときも、食べる時も、抱いたままである。やがて、子どもが乳離れすると、母ゴリラはオスのところに子どもを連れていき、そっと離れる」という。子どもは最初母親の姿が見えず、不安になるが、その後、父親の側で遊ぶようだ。ゴリラの輪に入り、母親がいなくとも平気になる。父親が、子どものけんかを仲裁し、一緒に遊ぶうち、子どもは父親を信頼し、ついで歩くようになって、オスは父親らしくなるのだそうだ。乳児期までは母親、乳離れした後は父親と、子育てをバトンタッチすることで、母親は子離れをし、一方で父親は、メスに子どもを託される相手として選ばれ、子どもに保護者として選ばれて初めて、父親になれるのだという。

では、人間はどうか。山極教授によれば、かつて幼児の死亡率が高かつた人類は、離乳を早くし、すぐに次の子どもが産めるように進化した。多産になれば、母親だけで子育てをするのは無理なので、父親やさらには上の世代が、共同で子育てするようになつた。子育てするにあたり、子どもと同じ世界に入るために、相手に「共感」する力を身につけていったという。

人間の赤ちゃんは、サルの赤ちゃんのように、常に母親の背中にしがみついていることはできない。ゴリラのように、乳離れして、一人立ちするまで、母親と離れずにはいけない。生まれてすぐに、周囲の色々な人によって守られなければ、生きていけないから、赤ちゃんは泣いて自己主張し、笑って相手を引き寄せるのだそうだ。そして、周囲の人は、このことで「共感」する力をさらに身につけ、長い時間をかけて、共同で子育てすることによって「家族」になり、そして複数の家族が共感して、「共同体」ができた。これが、人間の家族と社会のはじまりなのだ。そしてこれが、他の生物とは違う、人間が人間たる所以だともいえる。

このことを踏まえて、最近の社会の変化をおもうと、少し、心配になつてくる。例えば、メールやネットの利用の拡大により、直接人に会うことなく用事が済んだり、少子化が進むことで、共同での子育てが減ってきたり、一人暮らしが増え、個食化したり、といふことは、人間の家族、そして共同体が生まれるきっかけになつた、共感する力を、減退させることにつながらないだろうか、と。

相手をおもいやり、自分以外の者のために何かすることは、共感する力を持たない種のサルにはできないことなのだそうだ。申年の政治家だからこそ、申年の一年、共感する力を磨きたいと、おもう。

申年に申年の政治家としておもうこと